

●北海道新聞夕刊／2022年8月3日(水)付掲載

健康と医療についてゲストに語っていただくコーナーです

いきいきゼミナール

テーマ 「新型コロナ感染・療養後の長引く咳(せき)について」

ゲスト 白石内科クリニック 干野 英明 院長



—新型コロナウイルス感染症の療養後も咳(せき)症状が残っている場合、どのような病気が疑われますか。

新型コロナウイルス感染症の症状は、咳のほか、発熱や倦怠感、咽頭(いんと)痛などさまざまなものがあります。熱が下がり、のどの痛みなどもおさまり、体調が回復したと思っても、咳だけが残る場合があります。「コロナ後遺症」の可能性も考えられますが、コロナ感染・療養後に長引いている咳は、肺に通じる気道に炎症が起こる「ぜんそく」やその前段階とされる「咳ぜんそく」が疑われます。ぜんそくや咳ぜんそくの咳は、●季節の変わり目に咳が出る ●痰(たん)が少なく、乾いた咳が出る ●夜寝る前や早朝に咳が出る ●のどがイガイガしたりムズムズしたりする、といった特徴があります。ハウスダストや花粉、カビなどのアレルギー物質が原因となるこ

とが多く、小児ぜんそくの既往がある方やアレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎を持っている方がかかりやすいです。初期段階では、昼間は落ち着いていても、寝ている夜間や明け方に激しくせき込み、呼吸時に「ゼーゼー」「ヒューヒュー」といった音がする喘鳴(ぜんめい)が起こることが多いです。タバコを吸う方であれば、主に喫煙が原因で、気道が閉塞して呼吸機能

が低下する「COPD(慢性閉塞性肺疾患)」も疑われます。

—検査や治療について教えてください。

咳が1週間以上続く場合、まず胸部レントゲン検査を行います。異常が認められると、精密検査として胸部CT検査を行うのが一般的です。ぜんそくやCOPDの診断には、息を思いっきり吸ったところから勢よく吐き出し、その1秒間に吐いた量を評価する肺機能検査が有用ですが、息を吐き出す時に飛沫が飛ぶ可能性があるため、コロナ禍ではなかなか行いづらくなっています。そこで、肺機能検査に準ずるものとして、患者さんからの症状の聞き取りや患者さんに回答し

てもらった質問票が重要になります。

ぜんそく、咳ぜんそくの治療は、一般的な咳止めの薬では症状の改善がなかなか難しく、吸入ステロイドや気管支拡張剤などを使います。何よりも重要なのは、治療していく中で咳症状が落ち着いてきても、自己判断で治療を中断しないことです。気管支内の炎症は長く残ることが多いので、一定期間、決められた吸入回数で継続した治療を行うことが大切です。

COPDと診断された場合も、狭くなった気管支を拡げて呼吸を楽にする吸入薬を使います。ぜんそく同様、継続的な治療が必要です。また、症状を悪化させないためにも禁煙が治療の前提となります。

病院
訪問

白石内科クリニック

風邪、気管支炎、肺炎、喘息(ぜんそく)などの呼吸器疾患やアレルギー性鼻炎、花粉症といったアレルギー性疾患の治療を中心に、肺がんのセカンドオピニオン、禁煙外来(保険診療)まで、きめ細やかな診療を心がけています。2013年7月1日に移転しました。

住所/札幌市白石区中央1条7丁目10-30
白石中央メディカルビル 1階
電話番号/011-868-2711
診察受付/月・木曜 9:00~12:30 14:00~19:00、
火・金曜 9:00~12:30 14:00~18:00、
水・土曜 9:00~12:30
休診日/日曜・祝日 院長/干野 英明

企画制作/北海道新聞社営業局